

平塚を起点とする電車事業 (3)

(2020. 12)

平塚と大山を結ぶ電車計画

「平塚を起点とする電車事業(1)」では、金目川電気鉄道の敷設事業について記しました。1926(大正15)年の横浜貿易新報記事から事業主体が明記されていませんでしたが、平塚・大山町への鉄道が計画されていたことも併せて紹介いたしました。

平塚市史6 資料編 近代(2) p323には、以下のような1915(大正4)年の横浜貿易新報の記事が記されています。

平塚から大山までの軽便鉄道を運行する大山鉄道株式会社の公告記事です。

1915(大正4)年3月30日 商業登記公告

商号 大山鉄道株式会社

一 本店 中郡平塚町平塚貳千四番地

一 目的 中郡平塚町ヨリ中郡大山町ニ至ル軽便鉄道ヲ敷設シ、旅客及貨物ノ運輸営業ヲ為ス

一 設立年月日 大正四年参月拾壱日

一 資本総額 金貳拾万円

一 壹株金額 金五拾円

一 各株式払込金額 金五円

一 公告方法 所轄裁判所ノ公示スル新聞紙上ニ掲載

一 取締役 東京市日本橋区浜町貳丁目拾参番地

清水清五郎

中郡豊田村小嶺五百拾九番地

福井大弼

東京府荏原郡大森町貳千貳百五拾壱番地

松木敬之

同府豊多摩郡内藤新宿北裏町百八番地

岡本文平

一 監査役 中郡城島村大島四百五拾八番地

長谷川楽三郎

右 大正四年参月貳拾五日登記

事業主体は、大山鉄道株式会社です。神中鉄道株式会社、相陽鉄道株式会社でもありません。PCの検索からは、大山鉄道という会社名を見つけることはできませんでした。

大正4年、かなり早い時期から、平塚と大山参りなどの宗教・観光、景勝地の大山を結ぶ鉄道の企画が始められていたこととなります。

1915（大正4）年11月20日 （1）大山鉄道地鎮

村上義雄氏その他の発起に係る中郡平塚町を起点とし大山町・厚木町に至る大山鉄道株式会社にては、地所買入の交渉も纏まりたるに依り、明廿一日午後一時より平塚町字本宿南裏の松林中に於て地鎮祭を執行する由にて、関係町村の重立ちたる者に案内状を發したり、右祭事終つて模擬店の開放記念品贈与其の他の余興ある由

1915（大正4）年11月24日 （2）地鎮祭の盛況

概報の如く、去廿一日午後一時より大山鉄道地鎮祭は中郡平塚町字本宿松林中に於て舉行せり、会社側にては社長村上義雄氏・重役清浦子爵令息・森下支配人其の他数氏、来賓の重なるは宗中郡長・本城県会議員、其外郡会議員・町村会長及び有志者等壱百余名にして、雲出外二神職の清祓供饌式祝詞あり、村上社長の挨拶、宗郡長の祝辞、本城外数氏の祝辞演説ありて式を了へ、同山林中に園遊会は開かれたるが、余興として煙火、芸者手踊、新派劇等あり、盛會を極め夜に入りて散會したり

大山鉄道は「中郡平塚町ヨリ中郡大山町ニ至ル輕便鉄道ヲ敷設シ、旅客及貨物ノ運輸營業ヲ為ス」とあります。輕便鉄道は、一般の鉄道より規格が簡便、安価な建設が可能であり、維持運営費も抑制することができるとされています。平塚と近隣の秦野と二宮間にたゞこの運輸を主目的とした輕便鉄道が知られています。

1910（明治43）年には輕便鉄道法が、翌年には輕便鉄道補助法が施行されました。輕便鉄道法によると鉄道建設についての政府の統制が緩く、手続きが簡素化され、補助法により、政府からの支援として補助金が給付されました。鉄道建設の主体は、政府による幹線鉄道線に合わせ、地方資本による地域の鉄道線の建設と拡大されています。政府の後押しもあり、輕便鉄道の建設は1911（明治44）年から1913（大正2）年にかけて全国的に最盛期を迎えました。「輕便鉄道建設ブーム期」とも言われます。

平塚・大山間の輕便鉄道敷設の計画は、全国的な建設の流れに少し遅れての参入計画のようでした。

大山鉄道は、1915（大正4）年11月24日 地鎮祭を挙げています。以後、平塚・大山間の輕便鉄道の敷設計画の報道資料は見出されません。

平塚・大山間の電車敷設計画は、「平塚基点とする電車事業（2）」に記しました通り、大正15年、神中鉄道に受け継がれました。大山鉄道からの経緯は不明ですが、大正12年の横浜貿易新報の記事に、平塚・大山間の敷設予定は相陽鉄道の予定線とあります。

『輕便鉄道とはいえ、鉄道を自力で作るのはやはり過重な負担だったのである』（青木栄一 「地域社会から見た鉄道建設」）私達の地元での金目川電鉄、平塚・大山間の電車敷設事業の未完成は、地元の資金力がもたらした結果であったのでしょうか。（完了）